続・念願達成の正念場 その一

田宮 治

まず一頭の猪を確実に撃て

ただ「猪猟がやりたい」ということだけで、住み慣れた東京を離れ、せっかく建てた家まで売って、猪山の近くに引っ越して来た。まだ幼い子供四人と妻を説得してである。

かつて、私も好きな猟が思い切りできて、何の気兼ねもなく犬たちが飼える、そんな山里に住みたいと思ったものだが、いざとなるとなかなかできることではなかった。何事によらず念願を達成したり、物事を完成するには、まずもってやり遂げるのに一番よく、有利なところに身を置くのは大切なことである。

北嶋氏は、毎日通う勤務先から遠ざかってまでも猪の猟場を選び、猪犬を飼い、そして何よりも大切な良い同志を集め、四年間も一生懸命に頑張ってきたのである。

昔から「石の上にも三年」というけれど、かつて奥さんと二人でヤマドリを追って覚えたこの山里で、人生までも賭けているのである。北嶋氏のお父さんは今、彼が通う会社の社長だったが、三年前に亡くなったそうである。お父様も立派な猟人で、北嶋氏を岩手などに連れて行きヤマドリ猟を楽しんでいたという。私と全く同じ年で、ボートでトローリングまでやっていて、性格や話しっぷりまでそっくりだと、飲むたびに思い出したように話してくれる。

「父に孝行ができなかった。その分、田宮さんに……」とまで、ありがたいことを言ってくれる。奥さんも全く同じで、「うちでは気を使わないでください。本当に喜んでいるのだから……」といつも変わらない。

また、泊まりがけで猟をしているので、子供たちもみな「田宮さん、田宮さん」と言い寄って来て、孫のような気がする。皆様のそんな気持ちに報いるために、せめて猪猟では自分のできる最高の物を残らず出して、北嶋氏の父親代わりになれたらと思っている。

長い猟歴の中で、こんなに素直な若者に出会ったことも、こんな気持ちになったこともない。よし、必ず俺が大輪の花を咲かせてみせる。ビシビシ鍛えるから、目を大きく見開いて、よーく見ろ。そしてキチッと覚えてほしい。

猪猟などと言ってみたところで、話して分かるものではない。必ず俺がやって見せるから、そのとおりにやればよい。なあに、やる気になってコツさえつかめば、たいしたことではない。お前ならば必ずできる、簡単なことである。

猪猟での難題は、そのつど必ず俺がやって見せるから、良いと思ったことは自分に合うように修正したり、改良して生かして使ってほしい。どうか、この私を踏み台にして難題を乗り越えて立派な親方となり、楽しい猪猟の道を広げ、守って、素晴らしいものとして将来につなげてもらいたい。

あれも教えてやりたい、これも見せたいと一生懸命に頑張ったが、なかなかその成果は出ず、猪に逃げられる日が続いていた。

それでも、この一カ月間で「猪猟の本筋」は理解できるようになっていた。せっかく作った良いチャンスを物にできず、あと一歩が踏み出せずに悔しい思いをしていた。ためらわずにそのまま撃てばよいことなのに、せっかく近くまで追い込んだ猪に戻られたり、良いタツに立って二発も撃ちかけた

のに当たらなかったり。ぶち当たる現実は想像を遙かに超えたもので、その修正はなかなか大変なことである。

「北嶋さん、怒るなよ。そのうちすぐ上手になるから……」

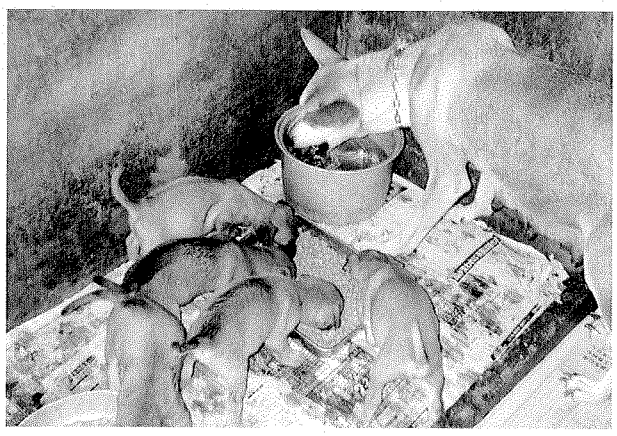
何度も言い続けたが、そんなことは何ほどのものではなく、始めた頃は誰でもがやってしまう失敗である。慣れてきて、体験さえ積めば簡単なことではあるのだが、良い指導者と一流芸の犬群がいなければ、なかなか結果の出ないのも事実である。

四年間も頑張ってきたのに、当クラブが突き当たっている問題が、この何でもないことなのである。こんなものは「ただ一頭の猪を確実に撃つこと」ですぐ分かるものなのに、本物の猪を見たことのない恐ろしさと驚き。必ず決めてやろうと思うあまりの焦りと慌てからくるものなのだ。「猪だけを見すぎる」ための失敗であるのだが、まだそのことにさえ気づいていないようで、さかんに言い訳をしている。

何とも滑稽で、お粗末。思わず笑ってしまうが、若者たちにしてみれば一生懸命であり、どんな時でも全力である。まだまだではあるが、若者らしいやる気が突っ走る様子を目の当たりにすると、その純真さが何よりなので、とても笑ってなどいられない。猪の初獲りを体験させるために小猪ではあるが、「さあ、刺してみろ！」と、絶対に大丈夫な頃合を見計って、北嶋氏に猪を刺すことで分かる勇気と感動を与えてやった。

因みに、猪を刺す時は止め犬たちの咬み芸が強く、絶対に猪が動けなくなっていて、全犬が食い下がり、犬たちを交わして銃を撃てない場合。または人家の近くや道路などが近くにあって、銃が使えない時に限られるのである。

この時のポイントは、三頭以上



（上）一直線に咬みに出る、咬み止め犬の仔犬。1頭や2頭の成犬では心もとない。安心して猟期を楽しめには一流芸の一軍、10頭くらいはそばに欲しい

（下）すっかり止め芸を究め、発見（起こし）も早くなったシロ号。どんな藪でもビクともしない

千葉のみたいな山ではブルーチックのような追い犬が良い。グループ猟では必ずタツにはめ、ケガのないのが何よりである

の咬み止め一流犬を使って猪が完全に動けなくなり、「ブッ、ブッ」とブタのような鳴き声になった時で、一番注意して見るところは猪の鬣（たてがみ）である。鬣が既に寝た状態で、犬たちと猪が押しくらまんじゅうでもしているようになってからである。

その時を逃さず、必ず上方の猪の後ろから素早く前足の付け根から心臓に達するように刺す。刺したら二、三回刃を揺すり、抜くと同時にまた後ろに飛び下がるのである。一、二頭の犬で抑え込んだように見えても、前から人が近づいたのでは猪は必ず突いて出るか、二頭くらいの犬ならば根こそぎ持って突っ走るものである。

北嶋氏は言われたとおり、刺し止めを見事に実行した。これを皮切りに、教えづらい「猪との接近戦」や「大物の寝屋止め」では絶対に必要な静かな寄り方と、五（メートル）くらいからの撃ち込み方を完全な形で実戦して、目の前で体験してもらったことですっかり自信をつけてきたようである。

今では「ほら出たぞ！」「突っ走れ！」と、檄を飛ばす私を尻目に一目散に止め現場に突っ走り、寄りつけるようになっていて、現実に突いて来た猪に二発も撃ち込んでいる。惜しくもあと一歩のところで逃げられてはいるが、素晴らしい成長を遂げている。ようやく四年間もの苦労で出来上がっていた大きな土台が突然現れて、猪が獲れるようになったことで、決して動かぬ本物になったようである。

この土台、つまり猪猟の基礎を揺るぎないものとして、さらなる成長に繋げるために、この段階では何が一番大切か、どの項目を教えたら分かっていただけるかなどを毎日考えていた。

まず、指令塔である北嶋氏には、その辺の意見を聞き、話し合った上で、あくまでも実戦を通して大技・小技を覚えてもらい、もって全員で思いどおりの猪猟ができる最良の道を探していた。

もともと猪猟などの真実は、逃がすことから始まるのである。かくいう私だって始めた頃は逃がしてばかりで、毎日が猪追いであっ

た。確実に思ったとおりの猪猟ができ、当たり前のように猪が獲れるには、失敗と挫折の積み重ねで覚える以外ないのである。

ましてや人様に見せたい時に、お手本どおりの犬芸や大技をやれるようになるのには、人知れず努力することであり、当然のこと恐れず失敗の山を積むことになる。その中から良いことを選び出し、繰り返し確かめるのであるが、どのこと一つを取り出しても、これが最良であるとか、一番近道だと断言できるようになるには「バカではなかろうか」と思うような、常識では考えられない苦労の道程である。

猪猟を究めるのに常道はない。

どんな藪であろうと、中で必死に戦っている犬たちがいるのだ。何が何でも飛び込んでいく勇気と止め撃ちをキチッと決められる腕が必要（千葉の猟場）

激戦を見事完勝。思い思いに楽しんでいる。激戦中の迫力はこんなものではない。右：シロ号、左：マロ号（後ろがヨシ号）

これが最良であるとか、一番の近道だなどと言ってみたところで、犬たちとともに猪を追い、這いずり回って自分で摑んだ俺流の猟法である。

何も好んで俺流の猟法を究めたのではないが、堂々とその猟法を教えなければならない。というのは、私が猪猟を始めた頃はどの県に出猟しても、必ず絶大な権力を持った親方中心のグループが存在し、勢力を張り巡らしていた。とても単独猟人や余所者（よそもの）の入り込む余地などなく、閉め出しなどは当たり前であったからである。

当時、猪はお金になったこともあり、なかなか他の猟人に自分の猟法や使っている猟場を教えるとか、良い犬は分けてもいただけなかった。それでも猪猟を志す者はそんなグループに入会して学ぶしかなかったのである。究めようと思う心とは裏腹に、捨てマチから始まって便利にこき使われ、少しのミスで怒鳴られ、怒られるのは常であり、思ったとおりの猟技術はとても学べなかったのである。

北嶋氏も誰もが通るそんな道を

選び、静岡のグループに入会。一生懸命頑張り、それなりの成果も上げたそうであるが、そんな体質に愛想が尽き、やめたらしい。ほとんどの猟人はここまでが限度のようで、それでも頑強に辛抱し、耐え抜いたごく一部の猟人や、あくまでも師は持たず、単独でわが道を貫き通した猟人だけが独自の一流技術を究め、猪猟を守り、育ててきたのである。

北嶋氏は友人と二人で自ら求めた猪猟の道を選び、このグループを立ち上げ、気の合う仲間と一緒に夢の実現に向かって頑張ってきたようである。北嶋氏の苦労話を聞いていると、ついつい自分が通ってきた昔が偲ばれ、悔しさまでも甦り、何が何でも悪い過去から抜け出てもらいたい。そのためには北嶋氏の意見をよく聞き、究めようとしている猪猟の基礎をキチッと教えねばならない。何度も何度も同じことの繰り返しで、猪の獲れる方法を実戦で体験することで体にたたきこみ、覚えてもらうことに重点を置き、頂点を目指したのである。

具体的には、難題はキチッと順を追ってやって見せることで、若者たちの猟に対する関心を高め、もって猟技の向上を図ることにした。

山の状況に合わせた犬の掛け方から始まって、山のどのあたりを狩り込んだらよいか。猪の寝屋はその山のどこで、犬たちをどこから入れて、猪はどこで撃つかなどをいつも問いかけ、正解の返ってくるまで真っ先に立って実戦して見せた。

このことさえキチッとできるようになれば、どこの山に出猟しようが、どんな荒猪に出くわそうが、ビクともしない猟人になっているはずである。ごく当たり前のように猪など獲れて、望まれればいつでも猪を撃って見てもらえるような立派な親方にもなれると思うが、そのためにも猪猟の基礎だけはキチッと覚えてもらって、揺るぎない土台作りに専念してもらうべく難題をビシビシぶつけていった。

北嶋氏も私の気持ちが分かっているようで、現代っ子の持つ体裁ぶりもぶっ飛ばし、なりふり構わずよく私についてきてくれた。

その甲斐あって、関東猪犬猟山彦会千葉支部の念願であった「犬殺しの荒猪」を、三頭の犬たちの見事な寝屋止めで撃ち獲ることができた。まず、一頭の猪を撃つことを当面の課題にしていただけに、出来過ぎた成果は、まさに夢の花であり、三分咲きといったところか。とにかく面白くなってきたようだ。

「サクラサク……」念願達成

初めて東京に出て念願の大学に合格、その喜びをまず田舎の両親に送った電文である。この短い「五文字」で、当時の世相やあの日の気持ち、そして両親の笑顔までもはっきりと思い出されるが、あの頃の受験生はみな一様にこの五文字で「念願達成」を伝えていた。

なぜ桜も咲かぬ十二月にと思うかもしれないが、私にしてみれば、大学での四年間は家庭教師のアルバイトだったので、北嶋氏に「さあ、今日はお前が撃ってみろ！　お前なら必ずできるよ」と元気づける言葉を投げかけた瞬間に、ふと何十年前の決意と感動が甦ってきたようである。

そう言っては何だが、人様に教えることは並大抵ではない。必ずその成果が出るまでは本人以上に心配なものである。何が何でもやり遂げる覚悟で、ただ一つ「猪の獲れるグループ」にしたい。名実ともに立派な支部になってもらうのは、その後、順次努力して修正していけばよい。猪猟では当たり前のことで、四年間も頑張っているのに、「猪が獲れない」というのだから、獲れない原因を洗い出し、猪が獲れて楽しい一流クラブにするために独断専行の俺流ではあるが、改善の大鉈を振るったのである。

たとえば、毎回必ず北嶋家に戻り奥様の作った料理で昼食をとることや、山に入る時にボトルの水も持っていないこと。確かに猪山は近いし、楽しい昼食会にもなるのだが、私からすれば絶対に認められないことである。

猪猟や熊猟などの大物猟はもともと、常に危険と隣り合わせである。一度山に踏み入れば、その先で何が起こるか計り知れない。そんな予期せぬ事態のために食料や水、ライターなどの身を守る物、猟具の必要な物を忘れずに詰めこんだリュックは必ず背中にあるのが、まずもって猟の基本である。

さらに、着るものは必ず目につくオレンジ色の物にしろ。

一つひとつ悪いことを改め、猪を獲ることにこだわった最高の技術集団構築に取り組んだ。その中でも基本中の基本は気構えだと思っているので、最後まで決して諦めない不屈の根性を植えつけるべく、山でも「まだまだその先に猪がいる」と言い続けてきた。

事実、北嶋氏に任せておくと、あと少しで終わりではあるのだが、そんな猟場の途中でタツ解除である。犬たちはまだ狩っているので、当然猪が出て、慌ててタツを戻すが、既に猪はそのタツを抜けた後だった。

千葉の山は入り込めない藪や長い出峰が続いているが、猪はそんな藪の中で、既に勢子や犬たちの様子に気づき、タツのいない安全な逃げ道を考えているのである。特に長い出峰では、猪は犬たちさえも気づかない早立ちをして、勢子の動きに合わせるように、先に先にと静かに移動しているのである。すぐ先が見えるので、もう「猪はいない」と思って諦めて狩るのをやめてしまえば、猪の思うツボである。

「そんなことは分かっている」「たいしたことではない」と、もし思っている猪猟人がいたら、それは大変な間違いである。野に生きる猪は大変なもので、追われ慣れてくるとそのくらいの芸当は当たり前のことなのである。

初猟時に多くいた猪が、パッタリと目につかなくなるのは勢子が気づかない出峰のどん詰まりや、反対の山などに密かに移動するからである。

このようなことは散々狩り込み、潜んでいる猪を探し当て、獲ってみないと決して分からない真実である。まさに猪が獲れるか、獲れないかの紙一重とはこのことであり、「最後まで決して諦めるな」というのは、このようなことがあるからで、「根性」とただ言っている一つの裏には、これだけのことが詰まっているのである。

「必ず北嶋氏を頂点まで連れて行く！」と心に決めた以上は、納得するまでやって見せる。このことに重点を置き、すぐにできることから順次メンタルなことも含め、最高のことまでやり遂げてきたのである。この辺で北嶋氏には勝負に出てもらいたい。

「さあ、今日はお前が撃つのだぞ！」と思いきり檄を飛ばす。元気にうなずくその顔には自信がみなぎり、一カ月前とは打って変わった気迫が出ている。獲れなくて当たり前の猪猟を突き破り、「必ず獲るぞ！」の自覚が芽生えたようで、実に頼もしい。北嶋氏は「本気で猪の獲れた時のことを考えねばならなくなったね……」と冗談まで飛び出す余裕である。

そういえば、最近では全員が次は俺が獲ってやると闘志を燃やし、われ先にと猟場を闊歩している。よしよし、これでよい。北嶋氏には桜に先がけて大猪を撃ち、念願成就の「サクラサク」を友人や全国に発信してもらいたい。

人は誰でも夢を持ち、その達成に向かって努力している。夢を咲かせようと思うあまりに大切な人生を棒に振ることさえある。おしなべて見事な大輪を咲かすには毎日の努力以外にないのである。しかし、努力したとて自分ではできそうもないのが夢だから、人の意見はよく聞き、難しいことは必ず見て覚えることだと思う。

夢の実現となると苦労や失敗は当たり前で、恐れず、諦めずに何度でも挑戦することである。美しく咲く桜だって折れてしまいそうな風雪に耐え、酷寒を乗り越えてこそ、見事な花が咲くのである。

たかが猪猟ではあるが、見事完成させ、人様に教えるとなると並大抵の努力ではない。誰かが捨て石になって猪猟の底上げを図らないことには、素晴らしい猪猟の将来はない。我欲を捨て大局的見地に立って、一人でも多くの若者に狩猟の良さを知らせたいものである。

（つづく）